

教育上の課題と工夫

2019年の12月に武漢で確認された新型コロナウイルス感染症は瞬く間に全世界に広がり、その影響を受け、本学でも2020年4月から急遽オンラインでの授業が開始となった。今回は別科助産専攻で実施したオンラインでの実習（NICU実習、離島実習、ウィメンズ・ヘルス実習）のうち、ウィメンズ・ヘルス実習について報告する。

実習オリエンテーションと事前学習の工夫

「実習の手引き」を基に「オンライン実習の手引き 教員用・学生用」の2種類を作成し、「実習展開を可視化」した。さらに事前学習を提示し、その成果を学生間で共有する時間を設け、実習への動機付けを行った。臨地実習は、助産師教育の中で実践能力の基礎を学ぶ重要な科目として位置づけられる。学内で学んだ知識・技術を臨地実習でどのように活用するのか（使う）を学生自身が気づくことで当該実習に必要な看護技術をイメージする力も育ち、さらなる動機付けにつながると考える。

設定上の工夫

「より実践の場に近づけた実習にする」方法について科内で検討を重ね、実習施設への協力を依頼した。その結果、実習施設の構造や機能、対象の特徴等が示されているDVDに加えケア展開に必要な問診表およびクリニカルパスなどを快く提供していただいた。

実習内容では、病棟の日課と合わせたスケジュールの組み立てにする、患者役の教員や模型にはモニター類や栄養チューブ等を装着する、など実際の療養環境をイメージできるような設定を行った。教員は学生から実習当日の朝にFormsで提出された記録内容を確認し、場面ごとにケアを実施する学生を選定し、「学生全員が参加できる」ように意識した。さらにPC・ビデオ・教員個人のiPhoneを活用し、学生のケア場面を「参加者全員で共有できる」よう工夫を行った。カンファレンスでは、国家試験の1か月前ということもあり、知識と技術および根拠を結びつけるような発問を心がけ、「学生と教員間の双方向になるようなディスカッション」を心がけた。

オンライン実習の利点および課題

学生の思考過程を確認しながら実習を展開できること、失敗してもやり直しができることなどが挙げられる。病棟や場面の設定など、ハード面はある程度まで臨床実習に近づけることが可能と考えるが、一方で実際の場面で生じる感情（不安や葛藤など）や緊張感を体験させるという点では限界（難しさ）もあった。さらに6人の教員がそれぞれの役割を担いながら進めるためマンパワーも必要である。

学生の意見

「環境を捉え、ケアにつなげることの大切さ」「普段は考えない部分についてディスカッションを通して具体的に考えることができた」など肯定的な意見が多かった。また、実習記録の課題では、「臨床にでた時～」や「助産師として～」と記されており、助産師として勤務している自己を想像しながら実習に取り組んでいる学生の成長もみてとれた。

With コロナに向けて

今後は、オンライン実習で得た学生の声を活かし、様々な状況下でも教育の質を担保できる実習内容の検討が重要となる。改めて COVID-19 がもたらしたものを考えてみると、「前例がなければ作ればよい。制約がある中で智慧と工夫を出し合うことで新たな教育の創造につながる」という発見が挙げられる。
